

# 石垣島採集の「ウムゲー」について

中村 潤子

## 1 はじめに

同志社大学歴史資料館収蔵の鼻の両側に木の棒がついた馬の頭に着ける装具は、中村が卒業間近の1984年3月に沖縄県の石垣島で購入し、同志社大学考古学研究室に寄贈したものである。

購入場所は、石垣島の南西部海岸沿いの宮良（みやら）にある「平良（ひらら、名前は不明）」氏の自宅であった。宿泊していた民宿の女主人に、民具を購入できる場所を尋ねたところ、教示された家である。当時、「近代化」が進みはじめ、伝統的な道具類が姿を消しつつあった石垣島において、氏はそれらを買って商っているということであった。馬具には、ほかに鞍がいくつかあったが、提示価格も高く嵩も重量もあるために購入を断念し、木製頭絡を3点購入した。購入価格は、保存状態が良くほぼ完形のもの（手綱無し）が4000円、口許部分と顎部分だけのものおよび口許左右の木棒のみのものがそれぞれ2000円であったと記憶する。

本例はそのうち最も保存状態が良いもので、個人で所蔵するよりもしかるべき場所で広く活用される資料になればと考え、指導教官であった森浩一先生を通じて寄贈したものである。

## 2 ウムゲーの構造と機能

### a. 各部の名称（試案）

少し前まで鹿児島～琉球列島で広く使用されていたこの種の頭絡については、トカラ列島宝島の「オモゲー」がいち早く下野敏美氏によって報告されているが、「エ」「オ」が「イ」「ウ」に近い発音となる沖縄では主として「ウムゲー」と呼ばれていることから、本稿では「ウムゲー」の語を使いたい。なお、与那国島で「ウムガイ」と呼ばれるように、これらは「面繫（おもがい）」から転化した語である。（下野 1980 ほか）

民具を語るに際しては当地の言葉を用いるべきであるが、地域や時代によって呼び名が変わるため、馬の頭部につけるものの総体を「頭絡（とうらく）」とし、「野繫勒（やけいろく、旧日本陸軍・武揚堂 1927）を参考に紐の各部を使用部位の名を冠して「- - 紐（ひも）」とし、ウムゲーそのものの名で呼ばれている左右の棒を「鼻木（はなぎ）」と仮称して論を進めたい。

## b. ウムゲーの構造

歴史資料館のウムゲーは、基本的には、頭絡本体を構成する項（うなじ）紐・咽（のど）紐・頬（ほお）紐からなり、頬紐の先端は鼻木の中央を通る。鼻木の上端は太い糸で結び付けられ、下端に太い紐が通されてその一端は手綱に連なる。下端を通る紐は2本の鼻木の間で「メグイ」と呼ばれる瓢箪形の木板の孔を通るが、メグイのもう一方の孔には咽紐が通る。

項紐・頬紐・咽紐は1本の紐からなる。馬の右側こめかみの結び目に始まって項紐や左右の頬紐へと連なり、その間に左側こめかみ下に咽紐を結ぶ輪を作ったのち右側結び目に戻り、その右側結び目から長い咽紐が出るが、その咽紐はメグイの孔を通った後に左側結び目の輪と結び付けられる。紐は、幅約0.8cmの白色の綿製の撚り紐で、咽紐を除く各部位の紐はすべて二重になっており、全長は優に2mを越える。紐絡み防止・装飾・魔除けのためと思われるが、約2cmおきに幅約3cmの赤と白の木綿の布で交互に包み、粗く手縫いしてある。

鼻木は、木を削りだして作られた全長32.8cm、幅6.2cm、厚み2.4cmの棒状のもので、装着した時に外側にくる部分は丸みを帯びて上下端は内側に湾曲し、中央部には内側に当たる部分に突起が削り出されている。中央部を中心に外側1/3ほどは細く稜線を持つほど削られるほか、上下端の孔があげられている部分には面取りがなされている。全体の状況からみて、幅6.2cm余、長さ32.8cm余、厚み2.4cm余の木材をもとに、外側2.2cmの間に丸みを帯びた稜を削りだし、上端も同様に尖らせた後、上端と下端を面取りして丸みをつけ、内側には二つの大きな割込みを作り、角を消す、という手順で作られている。中央部と下端の2対の約1cmの孔は、鑿ではなく機械工具で穿っている。上端の平行する細長い二列の孔は、先に刃のついた工具で相当に苦労して穿っているが、所期の目的ほどにはうまくあいていない。樹種の同定はできないが、年輪がはっきりしないので沖縄で育成した木材であろう。上端の細長い孔に太い木綿糸を8重に掛け、少し間隔をおいて左右の木を結び付け、それと90度振れて開く中央部の2孔には鼻木を保持する頬紐が通り、上端と同方向の下端の2孔には、長さ約80cmの木綿紐が、左側を輪にし中間でメグイの孔を通して右側両端を結び目にする形で渡される。手綱は左側下端の輪に取り付けられていたはずである。

メグイは、厚さ0.92cm、長さ12.4cmの瓢箪形の木板で、膨らんだ部分の幅は5.1cmと4.3cm、中央くびれ部幅は2.2cmである。1cmの孔が大きな方に2個1対・小さい方に1個、機械工具で開けられている。鼻木が全体に優美な曲線を描くことや木肌に残る加工痕、側木とメグイの孔の開け方などからみて、台鉋や小刀ではなく、比較的近代的な工具によって作られたものである。

## c. ウムゲーの基本的機能

ウムゲーの手綱は鼻木下端の紐の片方から出る1本だけであるが、この鼻木下端の紐はもう一方が固定されている結果、手綱を真横に引いた場合は反対側の鼻木の内側突起がそちら側の鼻を押すだけだが、手綱が前後に引かれた場合は鼻木下端の手綱が付く紐は手綱に引かれて外へ繰り出され、鼻木の下が狭まるとともに梃子の原理から中央部の突起が馬の鼻に食い込む。つまり、駄用な

どの引き馬の際にも乗用の際にも、馬が動いてくれなかったり、走り出して止まらない場合のように、手綱が前後に強く引かれるような状況下においては、馬に対して非常に強い信号（苦痛）を伝える構造になっているといえる。

さらに、手綱が緩められている時には頭の下にぶら下がっていたメグイが、手綱が引かれるとともに前方に引かれ、そこに連なる咽紐も前に引かれることになるが、そのことによって、項紐が下に引っ張られて面繫本体の脱落を防ぐ効果を生じさせるようになっている。手綱が強く引かれるような状況とは、馬の制御に大きな不具合が生じている場合であり、もし頭絡が外れれば、興奮した馬が走り出して大変なことになるから、この構造は非常に重要な配慮といえよう。

### 3 結びに替えて

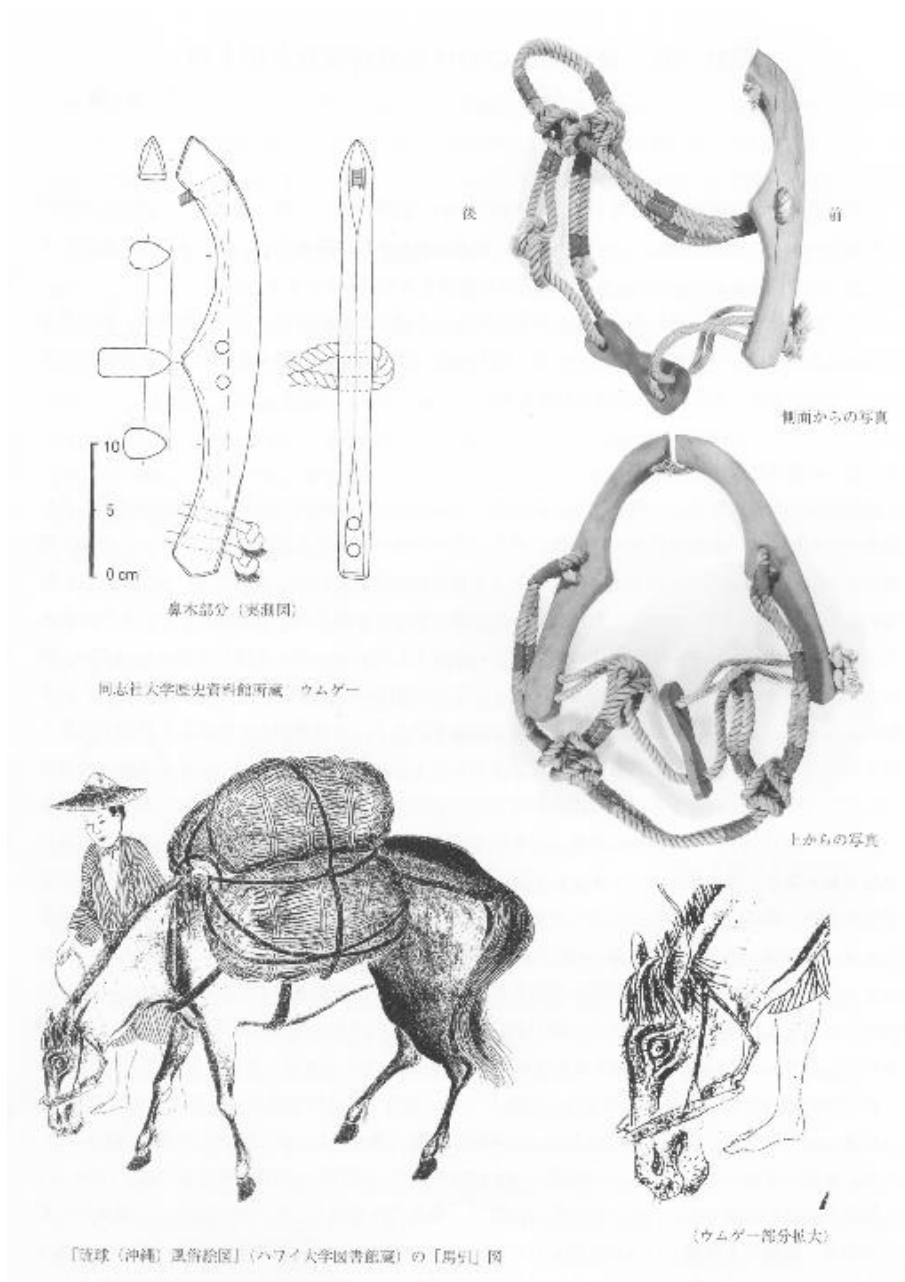
馬の頭絡は「オモヅラ（語源は面綱・面連）」と「オモガイ（面繫）」とに分けられ、金属製の銜をもたないオモヅラは牽き馬・繋ぎ馬・駄馬や繋ぎ飼育に使うもので、銜を持つオモガイは乗用とされ（『古今要覧考』）この分類ではウムゲーはオモヅラに相当するが、その機能性が、銜の無いことを補填し、乗用にも効果的であると評価されたからこそ、オモガイという名が与えられたのであろう。

このような簡単かつ効果的な頭絡は、沖縄だけのものではなく、本土においても「拍子」と呼ばれて江戸時代にも使われていて、屋代弘賢が『古今要覧考』で「松前陸奥国大和国讃岐国等」にあって以前は広く使われていたとし、瀧澤馬琴の「ひょうし考」（『兔園小説』）もある。近年では下野敏美氏・増田精一氏・小島摩文氏の研究があり、小島氏によって中国西南部～タイとチベット・モンゴルに存在することも明らかとなった。さらに、今回、江戸時代以前の本土と、明治期の沖縄の状況を知りうる資料を新たに見出すことができたので、少し紹介しておきたい。

一つは鎌倉時代に製作された『石山寺縁起』第二段の大江の浦の荷駄の図で、紐のオモヅラを付けた3頭に対し、最後尾の一頭には鼻先に黒く太い棒状のものが描かれる。絵に変化を持たせるために頭絡の形状を変化させたと思われるので、実際の使用はそれほど多くはなかったかもしれないが、この種の頭絡が鎌倉時代には実際に荷駄に使われていたことを示す資料として注目したい。

もう一つの資料は、明治後半に琉球国絵師の嶂山查丕烈によって描かれたハワイ大学宝玲文庫所蔵『琉球風俗絵図（ハワイ大学での名称は「沖縄風俗絵図」）』の「馬引」図であるが、その鼻木には湾曲も中央部の突起もほとんどなく、メグイは前後に1孔のみがある細いものである。

トカラ列島宝島のものや古い収集資料にも突起が無いところを見れば、突起がつくのは、明治の終わり以降のこのことである。本資料館所蔵品とともに中村が石垣島で購入したもう1例や沖縄各地で見掛けたものや下野氏の報告例の多くが、大きな突起を持ち、全体に極めてよく似た形状と構造をしていることは、その地域的な広がり・使用工具・平良氏の言を考えれば、自然な情報伝達のなかで新しい形式が各地で作られるようになったとするよりも、ある時期から沖縄本島で効率的に作られたものが商品として石垣などの各島嶼へ供給された結果とみるべきであろう。



## 参考文献

- [1] 島摩文 1996 「東アジアひょうし図譜」神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第29巻1号
- [2] 野敏美 1980 「小形馬とオモゲー」『南西諸島の民俗』法政大学出版局
- [3] 野敏美 1994 「ドサンコの拍子木」『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館
- [4] 山査丕烈 890年頃 ハワイ大学図書館所蔵『沖縄風俗絵図』(ハワイ大学宝玲叢刊編纂委員会ほか『琉球風俗絵図』宝玲叢刊第五集 1982 本邦書籍株式会社)
- [5] 揚堂 1927 『馬事提要』(改訂版、初版不明)
- [6] 田精一 1960 「埴輪馬に見る頭絡の結構」『考古学雑誌』45-4
- [7] 田精一 1974 「考古学から見た東亜の馬具の発達」『日本古代文化の探求 馬』社会思想社
- [8] 田精一 1988 「東アジアの“棒面撃”馬装具をめぐって」『考古学叢考』斉藤忠先生頌寿記念論文集刊行会 吉川弘文館
- [9] 代弘賢 1810 『古今要覧考』「器財部 馬具 籠頭 拍子」
- [10] 澤馬琴 1825年頃 「ひょうし考」『兔園小説』(『日本随筆大成』第2期第1巻 1928 所収)